
さっきまでは恋がしたい。

高橋うがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さつきまでは恋がしたい。

【Nコード】

N8923G

【作者名】

高橋うがい

【あらすじ】

俺は猛烈に恋がしなくなった。それこそ発作的に恋がしなくてしたくてたまらないのだ。彼女がいるがこれは恋なのだろうか？その答えは『さつき』の間だけに分かる。

おおお、猛烈に恋がしたい。勘定的かつ感情的な恋ではなく燃え
たぎるようなヤカンが「あ、あかん！ もうあかんで！」とぴーぴ
ー音を終始鳴らし続ける衝動的な恋がしたい。

俺が拳を震わすと傍らの彼女は言う。「アホや」

俺は言う。「アホじゃねえよ」

「はいはい」と唇の端をくつ、と吊る彼女の浅ましさたるや憎たら
しさたるや世界の悪をここに凝縮しました！、というキャッチコピ
ーを進呈したくなる。俺は発作的にこめかみを搔いて平静を装うが
前述の発言の通り心が荒んでいるのはあきらかな為、彼女はフハハ
などと嘲笑。フハハだと？ フハハはないだろうが！ アハハなら
ともかくだな、フハハはダメだつて。許せんつて。いい歳した女の
子がフハハなんて絶対にダメ。EUが認めると言っただとしても俺は
認めんぞ。

テレビの黒い照明が俺と彼女を照らす。これは波乱の予感。シヨ
ーアップナイターの予感。

「なによ。あたしの顔になんかついてるの？」

予感的中。

見てくれ、この怪訝顔。それに時折頬に殺意の『サ』の字をちら
つかせる器用さ。

「ついてねえし、見てねえよ」

アホが、と語尾に添えてもよかったが思いとどまった。これを添
えるとゴングが鳴る。間違いない。何年このヘチマ顔と付き合っ
てると思っっているんだ。サインペンとスケッチブックを渡されたら三
秒で日本列島よりも複雑な尻の痣を正確に描けるんだぜ。

あああ、猛烈に恋がしたい。ヘチマを抱いて眠る——ためしてガ
ッテンの二番煎じの残りカスみたいな番組が健康法として紹介した
ら翌日のスーパ―からヘチマがごっそり姿を消す——そんな恋では

なくてですね、当方が希望するのはそのですね、あのですね、もつとこうナポリ的といえますか「恋い焦がれるうつつ！」だとか「死んじやううつう！」と高熱に犯されて這いずりまわるような――そう、情熱。現状には情熱が足りんですね。はい、これは由々しき事態だと思えますし当方の年齢を考慮すると非常に厳しいのは確か「ねえちよつと、ジューズなくなつた」空になつたコップを眼前で振り振り。「冷蔵庫から取つてきてよ」

ちよい待ち。俺はお前の召使じゃねえし。むしろお前が取つてくべきだろ今度は。さっき俺電気消したし。わざわざよつこらつしよと立ちあがりーのてくてく歩きーのドア横のスイッチぱちん。これ結構重労働なの分かる？（この場合面倒な事を重労働と呼ぶ）

「自分で取つてこいよ」

「ええ……」

なにそのガツカリ顔。腹立つんですけど。かなり腹立つんですけど。

「なんでえ……？」

え、なんでほっぺ膨らませちゃったりしてんの？……こちとらザ・立腹って感じなんですけど！

こんなやつと沈みゆく船の先端で抱き合つて両手を広げて真実の愛を悟る、そんな真似は俺はできない。したくない。断固拒否の姿勢。全力で遺憾の意を示す。船員が「この船は沈む！」と叫んだとしても俺は「あつそう」と一蹴し爆睡するね。しかも部屋の鍵かけて彼女が入れないようにする。ややあつてドアどんどんどん。「うるせえなあ」。ドアどんどんどん。「安眠妨害で訴えるぞ」。なんてクールなんでしょうか、こんな人生の終焉つかつこが宜しいですよね。男の憧れ。あ、こ、が、れ。

「じゃあジャンケンしよ」

雨が降つたら傘をさせばいいでしょみたいなテンプレート通りの提案をした彼女は俺の肩に触れる。「ジャンケンしよジャンケン」「やだ」

「ええ…」

「やだね。お前が取ってこいよ」俺は自分の空になったコップを彼女に突き出す。「お前の番」

「なによ、番って」

「俺はさっき電気消したもん」

「さっき？ もう二時間以上も前じゃん」
しまった。

虚を突かれてちよいとばかりしたじろぎながらも俺は反論する。「俺の『さっき』の定義はギリ二時間」

「長すぎ」

「はあ？ んじゃあお前の『さっき』ってどれくらいよ」
「五分」

「ありえん」

「いや十分ぐらいかな」

「ありえんな」

「三十分かも」

「まだまだ」

「一時間かなあ」何故か遠い目。「うーん」

「まだまだ。常識ないのな」

「…一時間半ぐらいかも」

俺は待つてました、と指をぱつうんと鳴らし、「一時間半も二時間もそれほど変わらんやろ！ よし、じゃあ『さっき』ってことでジューズとりに行くのはお前な」

はめられたのに気付いた彼女は露骨に怒気をまきちらした足音をたてて冷蔵庫へ向かって行った。下の階の人に迷惑だからやめてくれ。

ややあつて戻ってきた彼女にコップを渡されたがなみなみ注がれていたから受け取る時にコーラがすこしこぼれた。悪意のある注ぎ方だが、一応ありがとうと礼を言うておく。

沈黙。

敵兵沈黙。

気まずい空気。

堪えられますか？ イエスオアノー。

「もちろんノーだ！」

「うわっと、なによいきなり」

「ああ、ごめん」

「次の見る？」彼女は上目遣いで問いかけてきて応えを待たずしてテレビの前に歩いていく。「どれにする？」

「ああそうやな…」俺の頭の中で幾多のストーリーが目まぐるしく再生されていく。しかし話のさわりだけ。なぜならあらずじしか情報がないからである。「どれでもいいわ」

がしよがしや。衝突音。

そうねえじゃあねえ、とぐずぐずする彼女。その横顔——可愛いじゃないですか、ねえ皆さん。

「これにする！」

てれれれってれー、という具合に彼女はテレビと周辺機器をいじりはじめる。今日日機械に苦手な女性などは少数派である。それは企業の成果ともいえるだろうし特に女性に根強くある——即ち「機械は難しいもの」という蔓延した風潮が根絶し——（以下略）。

準備を終えた彼女が俺の傍らに帰還して腰をよこっしょ…もとい静かにおろす。オレンジを羽交い絞めにして作られた橙色の液体が注がれたコップを掴んでからテレビを食い入るように見つめる。俺もそれに倣う。

次第に真っ黒だったテレビの画面が不明瞭ながらも段々と色彩を帯びてひとつの物語を映しだしていく。

——殺し屋とその妻、そして二人の子ども。両親は過去を隠し平凡ながらも幸せに暮らしていた。しかしある日彼らの過去を知る者つまり昔の同僚達が彼らの『今』を崩壊させようとする…。というサスペンス展開は前半だけであり、後半は父と母とその息子の三人は超能力に目覚めてしかもガンアクションも豊富となり悪党共を完

膚無きままに圧倒するという三文小説に泥を塗ってレンジで一分加熱したような展開であった。

「無茶苦茶な話だったね……」二時間の労働を終えたテレビの画面にエンドロールが流れはじめて彼女は苦笑した。「エスエフがやりたいたいならはじめからそうすればいいのに。脚本家は相当なアホが悪いクスリでもやってんじゃないの」

俺は沈黙考の構え。…違う。これはそんな軽率な物語ではない。この元殺し屋一家の物語はディ・ニーが実写に参戦した際に採用しそうな話ではない。もっと内奥に潜む何かが…。

突如俺の頬に伝う涙。おうおうおう、涙が止まらないよ父、母、ファーザー、マザー、神話の神々たちよ。おうおうおう。

蛇口をひねったように涙を流す俺を見て彼女は目をぱちくりとさせる。どこで泣いたのこいつ、といった表情である。そんなの関係なしに俺は自分の感性を信じる。

おおお、猛烈に超能力に目覚めたい。人々を苦しめる愚劣な超能力ではなく下の世話に役立つものでもなく万感の思いを具現化したような眩しい善の力がほしい。俺は超能力者になりたい。超能力とは先天的なものだろうか？ やはり科学の力で証明できないのだからそうなのだろうな。しかし諦めることはない。まだ目覚めていないだけという可能性があるにはあるのだ。

「ないない」

「俺のモノローグを勝手に読むな！」

俺は超能力者になりたかったんだ。ずっとそうだったんだ。ちょっとばかり忘れてただけだったんだ。

「『さつき』は恋がしたいとか言ってた癖に」空になったコップを持つ彼女は笑う。「アホや」

「『さつき』じゃねえし」

「じゃあ何よ」

そうやなあ、と俺は一応思考を巡らす演技をする。顎に手を添えたりしてみる。だが答えはとうに出ているのである。よしじゃあ、

はい、答えドン——。「随分昔の話や」

——終——

（後書き）

最後まで読んで頂き感謝です。

恋愛ものと思われて読まれた方、申し訳ございません。と言いつつこれは一応恋愛ものだと思います。男女のかけ合いに重点をおいて書きましたので。

これは観た映画やアニメ、ドラマの影響つてのをすぐ受ける人を書きました。子どもが特撮ものをみて「へんしん！」と叫んだり、おおきなお友達が深夜アニメをみて「ああ、なんとかかんとかちゃんと結婚したい！」とか言っちゃうそれです。

僕自身そういうことが多々あって、数日後もとい数分後には忘れて次の妄想を始めたりまするのでその戒めです。

自らへの戒めというのは『中二でロックで』と同じです。『戒めシリーズ』とも呼びましようか。いいえ、呼びません。気恥ずかしいから。

こんな僕でも羞恥心ぐらいはあるのです。それと反省心も。いやホント。それぐらいはこの五体満足の体に備えられているのです。がっちり防水仕様。

今回はあとがきを長文にしようと思いましたが眠くなったのでこらへんでやめておきます。

書き終えた後、布団に横になつて無意識に吐いた独り言が「ああ、志摩子さんとお茶してえ」だったことは墓場まで持っていきます。

ではでは。また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8923g/>

さっきまでは恋がしたい。

2010年10月8日15時08分発行